令和7年度版「学力向上ポートフォリオ（学校版）」【大宮南中学校】

① 今年度の課題と学力向上策

	学習上・指導上の課題		学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	<学習上の課題>学年と教科によってはC評価が2割を超えるものがある。引き続き指導と評価の改善に取り組む必要がある。 <指導上の課題>「学びに向かう力・人間性等」の育成のため、身に付けた力を実感して活用できる展開を考える必要がある。	⇒	各教科等の資質・能力を明確にした授業の振り返りを行う【毎授業・毎単元・毎題材】 各教科等の資質・能力に合わせた『個別最適な学びと協働的な学び』と『進路指導・キャリア教育』をとり入れた授業の実践【毎単元・毎題材】
思考・判断・表現	<学習上の課題>学年と教科によってはC評価が2割を超えるものもある。引き続き指導と評価の改善に取り組む必要がある。 <指導上の課題>「学びに向かう力・人間性等」の育成のため、身に付けた力を実感して活用できる展開を考える必要がある。	⇒	各教科等の資質・能力を明確にした授業の振り返りを行う【毎授業・毎単元・毎題材】 各教科等の資質・能力に合わせた『個別最適な学びと協働的な学び』と『進路指導・キャリア教育』をとり入れた授業の実践【毎単元・毎題材】

② 全国学力・学習状況調査結果について（分析・考察）

知識・技能	国語において「言葉の特徴や使い方に関する事項」に課題が見られた。語彙に関して無回答率も全国と比較して高く、全体的な正答率が高いことや正答数分布のグラフの結果も踏まえると二極化しており、個々の定着の差が大きく解答までたどり着けない生徒がいることもわかる。また、生徒質問において「一日あたりの読書の時間」や「新聞を読む割合」が全国と比較しても低く、新しい言葉の表現に触れる機会をつくる必要があると考える。数学において、「相対度数の意味を理解しているかどうか」に課題が見られた。同じ領域である「データの活用」の他の出題では良好な結果が示されているため、国語同様に問題を読み解くために必要な語彙力に課題があると考える。
思考・判断・表現	国語において「根拠を明確にして考える」出題において、無解答率が全国と比較して高いことが課題である。理科において「問題を解決するための課題を設定」する記述の出題において全国と比較して正答率が低いが、数学における思考・判断・表現が良好な結果であることを鑑みると、日本語を活用しながら思考・判断・表現する力の定着に課題があると考察する。生徒質問において国語の勉強が好きではあるが得意だと考えていない割合も多いため、言語活動による語彙の定着とその知識・技能を相互に関わらせながら思考・判断・表現を育成していく必要があると考える。

③

	中間期報告		中間期見直し
	評価（※）	学力向上策の達成状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	B	本校の教員の70%が資質・能力を明確にした授業の振り返りを行うことができた。振り返りは全教員が行ってはいるが、資質・能力を明確にして見取ることができる振り返りの工夫が必要である。振り返りの頻度は毎授業が40%、毎単元（題材）が47%、毎学期が7%であり、その他にも、「新しい考え方などを学習した際」「単元のスモールステップに応じて2～3hに一度程度」など、振り返りの機会に工夫が見られた。	特になし
思考・判断・表現	B	各教科等の思考・判断・表現とかかわりが深く、学校課題研究の研究主題である『個別最適な学びと協働的な学び』を取り入れた授業の実践を行えた教員は96%、『進路指導・キャリア教育』とかかわりの深い社会人基礎力を取り入れた授業の実践を行えた教員は78%であった。、『進路指導・キャリア教育』と関連付けられる「社会人基礎力」の中でも、「主体性」や「課題発見力」を授業に取り入れることができた。	特になし

※評価　A 8割以上（達成）B 6割以上（おおむね達成）C 6割未満（あと一歩）

④ さいたま市学習状況調査結果について（分析・考察）

知識・技能	全体の学力に関する調査では、概ねさいたま市の調査を上回る。しかし、各学年において課題が考えられる。第1学年ではすべての教科において動画問題が市の平均を下回っており、動画の状況から知識・技能と関連付けることに課題がある。また、国語科では「漢字を使うことができるかどうか」、数学科では「データの活用」において課題が見られるため、全国学力・学習状況調査の分析と同様に、様々な事象を読み解くために必要な知識・技能を身に付けることが必要であると考える。第2学年は、特に理科において知識・技能15問中4問が市の平均を下回り、課題となった。全体から考えると市の平均を大きく上回る項目も多くあるため、局所的に課題になったのではないかと考える。
思考・判断・表現	全体の学力に関する調査では、概ねさいたま市の調査を上回る。しかし、各学年において課題が考えられる。第1学年では、国語科において「関係などに注意して、話の構成を考えること」「根拠を明確にして考えること」、数学科において「説明すること」、社会科において「地図を活用、読み取ること、正しく捉えること」、理科において「図から読み取ること、考察」が市の平均を下回るため、情報やグラフ、図などから関連付けながら思考することに課題が見られると考える。第2学年では、知識・技能と同様に理科において局所的に課題があると考える。

⑤ 学力向上策の達成状況

	評価（※）	
知識・技能	B	本校の教員の76%が資質・能力を明確にした授業の振り返りを行うことができた。振り返りは全教員が行ってはいるが、今後も資質・能力を明確にして見取ることができる振り返りの工夫が必要である。振り返りの頻度が、学期末には毎授業が44%、毎単元（題材）が48%、毎学期が7%であり、資質・能力を身に付けるための振り返りとして継続ができている。
思考・判断・表現	A	各教科等の思考・判断・表現とかかわりが深く、学校課題研究の研究主題である『個別最適な学びと協働的な学び』を取り入れた授業の実践を行えた教員は100%、『進路指導・キャリア教育』とかかわりの深い社会人基礎力を各教科等の資質・能力と関連付け、取り入れた授業の実践を行えた教員は90%であった。、『進路指導・キャリア教育』と関連付けられる「社会人基礎力」の中でも、「主体性」や「課題発見力」を授業に取り入れることができているが、「傾聴力」や「状況把握力」を意識した授業展開も多く見られた。

※評価　A 8割以上（達成）B 6割以上（おおむね達成）C 6割未満（あと一歩）